オクリモノ

贈り歌

茜陽香

おくりもの

鈍色の線路に足裏が触れるたび、彼らの後ろには文字が溢れ飛んでいくのだった。
そこは大きな駅のホームの一つで、次の列車の時刻を表す掲示板には異国の文字が並んでいる。
列車を待つ人たちは誰も彼らに関心がなく、携帯電子機の画面にご執心だ。眉間に皺を寄せるサラリーマンの前を、トランポリンの如き身軽さで少年少女は飛び跳ねて行く。
彼らは皆歌詠みだ。五七のリズムを崩さずに、ポーンポーンと線路の上を跳ねるのだ。

蝶の名を持つ彼女は白地に紺のスニーカーをキュッと鳴らす。力強く枕木を蹴り、前へ前へと笑いながら駆けて行く。

『君が好き、今のところは、世界一……』

きらきら光る文字の列はやがてくるくると円を描き、鮮やかな帯となって少女の背を彩るのだ。

どこまでもどこまでも、線路の続く限り言葉は溢れてくる。けれどもそれが永遠というわけではない。

おくりもの

「電車が来たよ！」

悲鳴じみた甲高い声に、少年達は一斉に頬を引き攣らせた。早く、線路を駆け抜け駅を出なければ。或いはホームへと飛び上がらなければ。
現実世界の痛みと思いやりの欠如で形作られた車両は何の躊躇もなく駅へと侵入し、耳障りな摩擦音と激しい火花で線路を蹂躙する。
五七の最後の七を詠み上げられないまま、ホームへ転がり大人たちの列に並ばされ、開いたドアへと押し込まれていく者。どうしても作り上げたかったうつくしさを抱き、車輪の下へと埋もれていく者。高く高く飛び上がり降りるべき場所を見失う者。
混乱と失望の最中を、辛うじて駅を抜け出た者達が呆然と立ち尽くし振り返る。

「忘れないで」

囁くような少年の声に誰かが頷いた。言葉は永遠だ。刻まれた音は消える事がないのだ。
それを証に生きていくのが少年少女なのだから。ぼやぼやしている暇はない。次の言葉を刻む為、畏れず線路に踏み込もう。

柔らかなバレェシューズが真っ先に地を蹴った。列車の去った駅にはまだ人気がない。
朝焼け前の静謐な空気を、真夜中のしんとした静粛を、トン、と爪先が優しくつつく。たちまち言葉は光となって、彼女の背中を染め上げる。溢れ出たリボンを辿るように、次の少女が、また次の少年が、線路の上へと踊り出す。

季節の名を持つ少年が、ゆっくりと枕木を踏みしめた。軽やかに飛び跳ねる仲間達を見上げながら、殆ど歩くように隣の枕木へ足をかける。

『春の歌……』

それでも少年の足元からは細い光が立ち上り、涙の色をしたその文字は透き通る流れを作って彼の後ろへ続くのだ。

『夏秋冬のメロディも……』

目を閉じ歌いながら進む彼を、裸足の少女が追いかける。隣を並んで笑いあい、先に行くねと前を見る。
追い越しは禁止だよ。それなら一緒に行けばいい。ゆるりと繋いだ手は温く、思わず零れた笑い声でホームは満たされる。

おくりもの

どこもかしこも子供達の笑い声が広がっていた。誰もいないホームの上も、薄暗い階段も先の見えない改札も。
目深に帽子をかぶった駅員の喫煙室にさえ、子供達の声が届いていた。

ついさっきそこを通った電車の事など皆とうに忘れていた。線路は音を立て軋むものではなく、凛と冷えて歌を形作る為のものだった。

＜眠れ、眠れ、母の腕に、眠れ、眠れ、母の胸に＞

スピーカーが大音量で流す音楽さえも打ち消して、少女達はひらひらと言葉を翻す。駅員達は渋面でモニタを眺め、やれやれと首を横に振る。
最早彼らの創作を止める術などありはしない。気高く尊く卑しく愚かに、妄想を戯言を情景を世界を作り出す。

数百ボルトの電圧をも畏れず、裸足でそこを走る少女がいる。冷え切った鉄の冷たさや雷に打たれるような刺激さえ、うつくしい世界の糧になると彼女は笑う。

駅員達にそっくりの顰め面で線路を蹴る少年がいる。押し込められたロマンティシズムは叩きつける足先から否応もなく溢れ出て、彼の淡い恋心を歌にする。

コンクリートの無機質なホームに、詠み上げた歌をルージュで描く少女がいる。大人びた眼差しの奥に悪戯を喜ぶ色を隠して、素っ気無い文字で艶やかに歌を綴る。

作りかけの歌を潔く突き放す少年がいる。当て所なく縮こまった言葉は小さな石となり、枕木の隙間を埋めて沈黙を守る。

高らかになだらかに、鳴り響く音楽よりもはっきりと、歌詠みの少年少女はそれを描く。名前もない、分類もされない、類似品など存在しないものを作り続ける。
無邪気に飛び跳ねてベッドのスプリングを軋ませた事ならきっと誰しもがあるはずで、それに良く似た足取りが彼らの創作を弾ませる。

そうして紡がれ描かれ詠まれたものを、私は君に贈ろうと思う。